

# 門と木曾福島



いえざる



# 山村蘇

## 蘇門の師

山村蘇門は寛保二年（一七四二）第八代木曾代官良啓の「男として生まれた。幼名を七之助、名は良由、字（別名）を

君裕、蘇門と号した。

幼くして読書を好み、十歳の頃は昼夜本を手にして読書にふけったので、侍医が心配して父の良啓に告げてやめ

させようとしたが、かえつてこれを悲しみ、食事をとろうとしなかつたので、侍医も驚いて好きな様にさせたという。

宝暦（一七五一～六四）の初年、山村家

の侍医であり、本草学者であった三村道益について学び、宝暦十一年（一七六二）、二十歳にして将軍代替わりのあいさつのため、父に従つて江戸へ参府して將軍家治にお目見えした。

江戸滞在中に、大内熊耳に師事し、

木曾へ帰り、その後は疑問の点があると書きとめておき、手紙で教えを受けたという。

明和三年（一七六六）、京都の江村北綱戸（現・千葉県旭市）に移され、義昌なき後、木曾氏は断絶し、浪人となつていた。

没後、南宮大湫に教えを受けたが、大

湫は、中西淡淵に学び、細井平洲とは同門であつたから、蘇門も平洲と交流して教えを受けることになったのである。

## 山村氏と木曾福島

山村氏の祖先は、木曾の領主であつた木曾氏に仕えた。戦国時代の末、領主木曾義昌は、豊臣秀吉によつて下総

に属したが、福島関所を預かる幕府直参旗本の身分は据え置かれたので、江戸に屋敷を与えられた一方、尾張藩の

木曾代官として、名古屋にも屋敷を与えていた。

室町時代、木曾を統一した木曾氏は、応永間（一三九四～一四一八）、木曾福島に進出して小丸山城、上之段城を築いた。木曾福島の町はこの城下町として発達したもので、木曾川の対岸に

領となつていた木曾を攻略した功績により、幕府領になつた木曾の代官に任命されて、中山道の福島関所を預かつた。

元和元年（一六一五）、木曾は尾張藩に属したが、福島関所を預かる幕府直

参旗本の身分は据え置かれたので、江戸に屋敷を与えられた一方、尾張藩の木曾代官として、名古屋にも屋敷を与えていた。

関ヶ原の合戦に際し、山村良候、良勝父子は徳川家康に召しだされ、豊臣

詰の城として福島城を築き、その麓にやかた館を設けて木曾義昌が居住した。山村氏の代官屋敷はこの館跡を踏襲したものである。木曽川を挟んで、対岸は中山道福島宿で、街道に沿つて八沢町、上之段町が続き、山村氏の家臣の居住する代官屋敷に續々向町とともに町方三町と呼ばれていたものである。

山村氏は初代代官良候より父良啓まで八代続いたが、長子が早世したので、天明元年（一七八一）、二男の蘇門が家督を継いで甚兵衛を襲名した。

本曾は森林が多く田畠が少ないので、米は必要とするだけの収穫はなく、高米は必要とするだけの収穫はなく、高  
であったが、中山道の宿場として、また木材伐り出しのための入用として松  
本領、諏訪、伊那、美濃等から移入さ  
れていた。

凶作になると、各地からの米の流入が滞り、米価が高騰する。この頃は全国的に凶作で各地に一揆が起り、街道を通して木曽にも伝えられ、住民にも影響を与えたと思われる。北は賀川宿、南は野尻宿から騒動の群衆が福島宿へ向かつて押し寄せた。代官所では番人を増員して関所を固め、甲冑を身の結果、一行の願いが聞き入れられたとして三日後に騒動は収まつたが、尾張藩から取り調べの役人が出張して追放や多くの入牢者を出した。このことは蘇門にとって忘れられない経験となつた。

代官蘇門の治世

蘇門が家督を継いだ頃は、山村家の財政は多くの借財がかさみ、危機に瀕していた。木曽の豊富な森林資源は、はじめ山村氏の管理するところであったが、その伐採には厳しい制限がなされていた。そのうえ、享保の検地以後は伐り尽くされて良材がなくなつたとの理由で、尾張藩の直接支配するところとなり、上松に材木役所が設けられていた。

一方、石作駒石を勘定役に登用して財政の立て直しにかかった。駒石は債権者や有力者を集めて山村家の財政に家督を継いだ鴨門は、僕約を進める

権者は、領民に信望を得た蘇門の信頼する駒石の清廉潔白な人柄と、誠意ある対応に感じて証文を破棄し、有力者も私財を投じて協力を惜しまなかつたので、傾きかけていた山村家の財政は立ち直つたという。

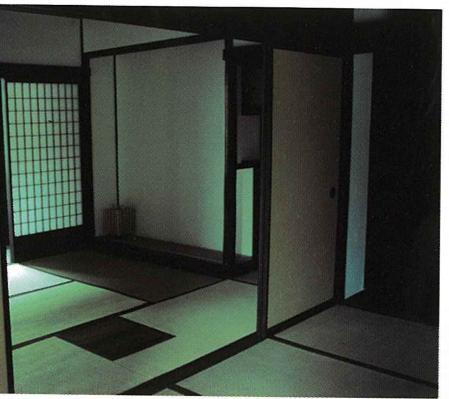
天明二年（一七八二）ころからは凶作の年が続くようになった。蘇門は、この凶作に対しても木曽に米を入れて、各藩に働きかけて米の確保に尽力した。天明四年三月には、木曽の北端の



山村代官屋敷

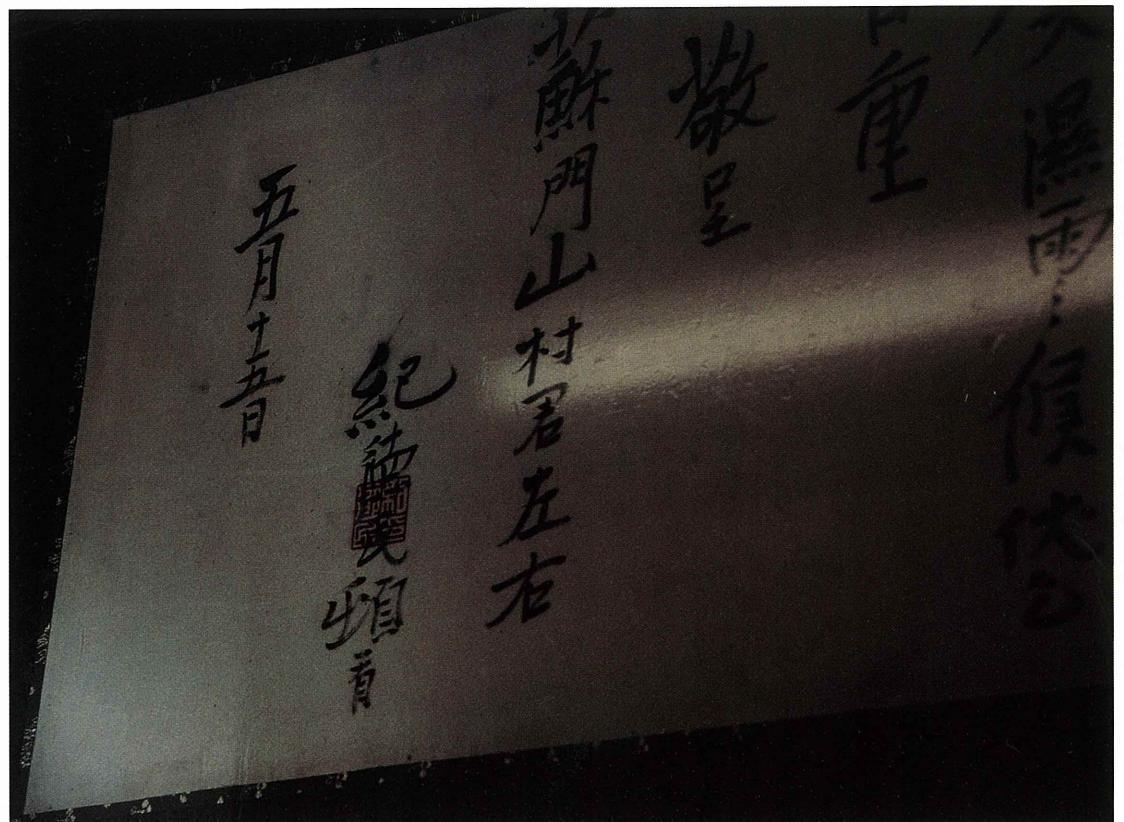
贊川宿まで美濃米が送られて、四月上旬まで売られたが、米の値段は松本平の一升百六十文より安い一升百二十四文であつたといふ。

天明六年に蘇門は江戸へ出府して、木曾の周辺の幕府領の村々を江戸時代の初めのように木曾の預かり所として米の流通が安定するように幕府へ願い出たが、取り上げられなかつたけれども、松本、諏訪、伊那の各藩へは、幕府から「山村甚兵衛じんべえ」がかけ合い次第米穀をさしつかえないように木曾へ入れ



翠山楼

るよう、「という御達しが出された。また蘇門は駒石を伴つて領内を巡視して米穀を施し、病人には薬を与えて救済した。こうして、木曾では餓死を免れた者が多かつた」という。



細井平洲から山村蘇門に宛てた手紙

伝承によると、このころ、木曾路を通った松平定信が民情を観察するとき、蘇門を神のように敬い信頼して、治世が良く行き届いているのに驚いたといい、定信は蘇門を老中に抜擢しようとしたところ尾張藩がこれを拒んで家老に登用したという。

天明七年（一七八八）四月、細井平洲は樺島石梁を伴つて江戸を発ち中山道を下つて故郷の平島村（現・愛知県東海市）へ帰る途中、山村邸に泊まつた。蘇門が領民に尊敬され信頼されて治世が良く行き届いたのは、平洲の教えによるところが大きかつたことだろう。この日、平洲と蘇門は彼我を忘れ語り合つたという。

この年の暮れ、父子共に尾張へ召しだされ、兄の遺子良喬に家督を譲つて尾張藩の家老となり、知行三千石を賜つた。

寛政二年（一七九〇）には尾張藩邸江戸定府詰となり、同五年には従五位

駒石は蘇門のよき詩友でもあり、共に詩作に磨きをかけた。蘇門の詩文は「清音樓詩鈔」「清音樓集」にまとめられているが、詩鈔には延岡藩主の内藤政陽江村北海、南宮大湫が序文を寄せている。跋文は石作駒石である。清音樓集の序文は樺島石梁が書いている。また、駒石の詩は「翠山樓詩集」として刊行されたが、これには蘇門が序文を寄せている。

蘇門は、寛政十年（一七九八）、五十七歳で病氣の故をもつて尾張藩家老の職を辞し、老後の禄五十人扶持を与えるられて江戸芝の賜亭清音亭に隠居した。その後は、江戸、尾張と木曾を往来して諸名家との交流を深めた。

文化七年（一八一〇）、諸国を遍歴して渡辺方壺が木曾へ来た。方壺は詩作の才に優れていたので、蘇門は住居を与えて共に詩作をして、二人の詩集「忘形集」を上梓した。序文は樺島石梁、跋

## 詩友交流

下伊勢守に任せられた。

文は家臣の秋元公英が書いている。方壇は木曽に居ること二十年、家臣の武居敬斎と共に山村家の学問所の開設に尽力した。

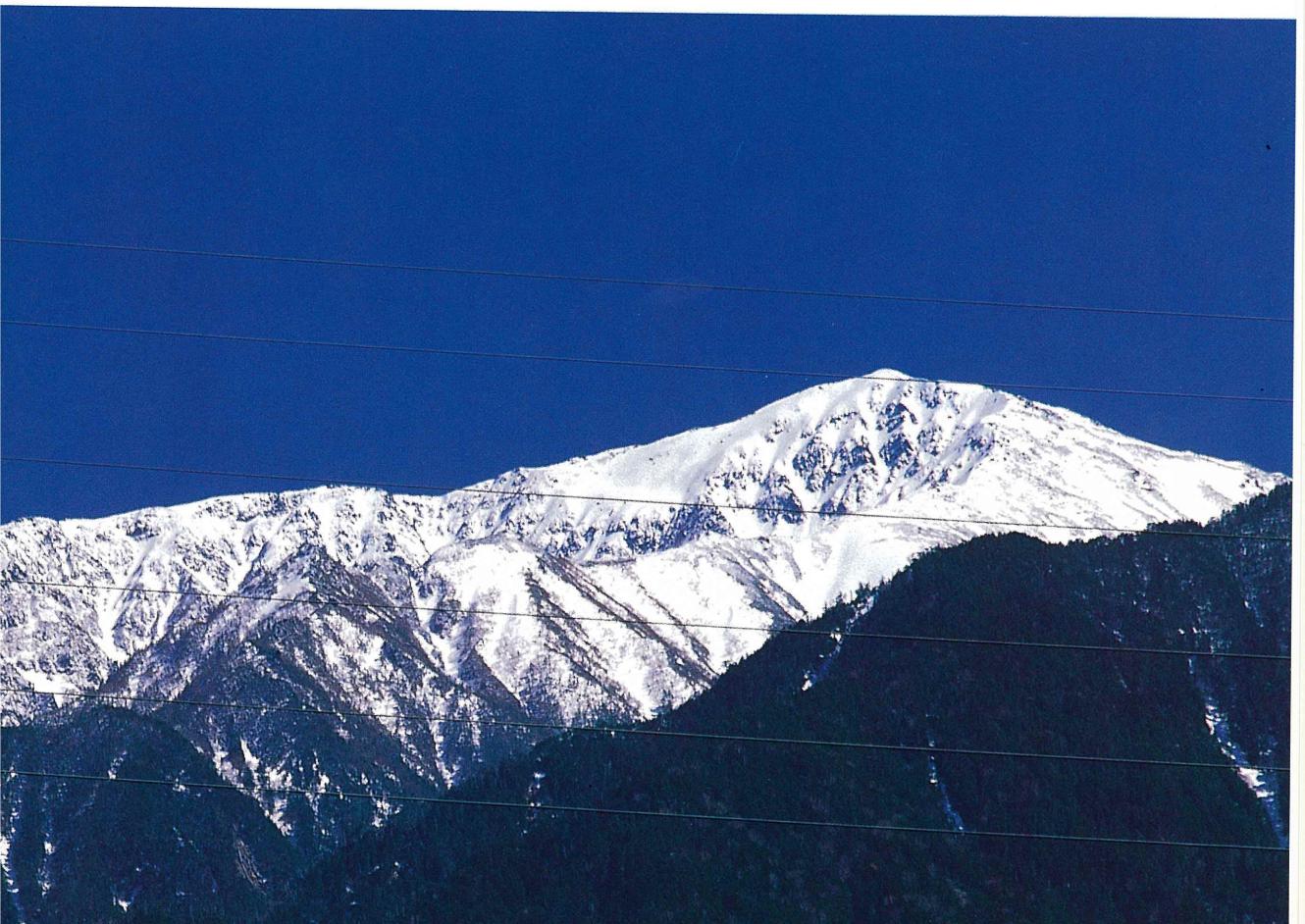
文化十一年（一八一五）には柳橋で梯箕嶺<sup>かんざいりょう</sup>、菅茶山<sup>かんさざん</sup>と会し船遊びをし、三月三日には赤羽の屋敷に在府の詩友を招いて曲水<sup>えん</sup>の宴を開いた。瀧川南谷、古賀精里、立原翠軒、梯箕嶺、古賀殻<sup>こう</sup>堂、榊原草澤、大沼竹溪、渡辺方壇など十七人が集まつたという。このときできた詩は家臣の秋元公英、國見以禮<sup>のわらきんしゅう</sup>、武居敬斎<sup>あきらけいさい</sup>等の詩を含めて「暢情集」として刊行された。

蘇門が江戸の尾張藩邸に居住したころ、平洲の屋敷とは二三十歩の近くにあり、たまたま米沢の神保蘭室が平洲のもとを訪れていたが、まだ一度も会うことがなかつた。後に石梁<sup>いりゆう</sup>を久留米邸に訪ねて歓談したおり蘭室が米沢で引退していると聞き、詩を作つて送つた。漢詩は韻<sup>いん</sup>を踏んで作るのであるが、蘇門が送つた詩は一束であった。返しの詩は次韻を踏んで返すのが普通であるが、蘭室からは、二冬の韻で和した詩を送つてきた。これはこの先も続けようとの表れである。この詩作の

法則から進めると、次は、三江、四支と続き、上平十五韻、下平十五韻の三十韻を続けなければ完結しないことになる。蘇門は感激して三江の詩を作つて送つた。遠く離れた米沢との手紙のやり取りではいつ終わるともわからないう。二人の年齢もすでに高齢になつてゐる。しかし、数年にしてできたので、これを石梁に送つた。石梁からは次韻三十韻を加えて送つてきた。蘇門はこれを版本に刻して送つた。一度も会うことがなかつた蘇門と蘭室の唱和と石梁の友情でできた「唱和集」は画期的なことであつた。この版本は今も木曾福島の代官屋敷に残されている。

## 蘇門と木曾福島

木曾福島は蘇門のふるさとであり、先祖代々の靈の鎮まるところであつた。木曾の宿場の有力者や、村の庄屋等の中には中世山村氏と共に領主木曾氏に仕え、江戸時代には土着して代々村役人等を務めたものも多かつた。これは領民と山村氏の親密な関係を築くことにもなつた。木曾では尾張侯を尾張の



卷之三

卷之三

二二

「我」是誰？我是誰？我是誰？

故其子曰：「吾父之子，其名何也？」

WILHELM HEINRICH RÖHM

如是等事，皆是大乘經義，非小乘所說。

卷之三

正月の朝、お出でになつた。お出でになつた。お出でになつた。お出でになつた。

「さすまに」「こじらへ」には、

のものは、木曾  
巻くなるから、  
関所では「入り  
砲と、江戸から  
武官によつて三

たつて木曾福  
八日他界した。

めも形式的とな  
を必要とし、特  
後の手は、未

蘇門は、版木を彫る大脇父子への感謝の心を忘れなかつた。「青音媛集」に

次の語を收めている

憐れむ、爾が常に剗廟の工を將つ  
孜孜として父子山翁に事うるを

歳にしてなお、中山後凋軒に長沼流の兵法を習つてゐる。

# 山村蘇門年譜

で き ご と

| 西暦   | 年号   | 年齢 | できごと  |
|------|------|----|---|
| 1742 | 寛保 2 | 1  | 3月6日生まれ、七之助と名付けられる。                             |
| 1745 | 延享 2 | 4  | 尾張侯(宗勝)、俳人横井也有を従えて木曽路を通り山村邸に泊まる。                |
| 1752 | 宝曆 2 | 11 | 11月、祖父の良及(宗仁)が67歳で亡くなる。                         |
| 1753 | 3    | 12 | 細井平州、江戸で嚙鳴館を開く。                                 |
| 1759 | 9    | 18 | 兄良恭が31歳で亡くなる。この頃、蘇門は式部と名を変える。                   |
| 1761 | 11   | 20 | 父に随って参府し、將軍家治にお目見えする。                           |
| 1763 | 13   | 22 | 江戸に滞在中、大内熊耳に師事し教えを受ける。江戸に出てきた滝鶴台や、秋山玉山と知り合う。    |
| 1765 | 明和 2 | 24 | 12月11日、玉山、63歳で亡くなる。<br>伊那伊豆木の小笠原長輝の娘嘉彌子を奥方に迎える。 |
| 1766 |      | 25 | 石作駒石、伊勢の学者南宮大漱に師事する。                            |
| 1768 |      | 27 | 京都の江村北海の門に入門して教えを受ける。                           |
| 1769 |      | 28 | 駒石、木曾に帰る。                                       |
| 1772 | 安永 元 | 31 | 木曾騒動起こる。南宮大漱江戸に移り、嚙鳴館に住む。上杉鷹山、米沢へ初入部。           |
| 1775 |      | 34 | 冬、蘇門、尾張へ行く。                                     |
| 1776 |      | 35 | 蘇門の「清音樓詩鈔」できる。                                  |
| 1777 |      | 36 | 4月、大内熊耳が80歳で亡くなる。                               |
| 1779 |      | 38 | 駒石、江戸に遊学する。蘇門、詩を作つて送る。                          |
| 1781 | 天明 元 | 40 | 3月、実弟の良音が亡くなる。                                  |
| 1782 |      | 41 | 10月、家督を嗣ぐ。甚兵衛良由と名のる。                            |
| 1783 |      | 42 | 良喬を連れて参府し、將軍家治にお目見えする。                          |
| 1786 |      | 45 | 江村北海の「授業編」に序文を書く。                               |
| 1787 |      | 46 | 樺島石梁、平洲の門に入り、嚙鳴館に学ぶ。蘇門、石梁と知り合う。                 |
|      |      |    | 全国的に飢饉となり木曾は最も甚だしい。                             |
|      |      |    | 蘇門は村々を回って領民を救う。尾張藩はその功績を賞して年寄役とする。              |
| 1788 |      | 47 | 4月、平洲、石梁と共に江戸から尾張へ帰る途中木曾山村邸に泊まる。                |
|      |      |    | 5月、蘇門、再び江戸に行く。将軍家斉にお目見えする。                      |
| 1789 | 寛政 元 | 48 | 3月、江村北海、76歳で亡くなる。蘇門、墓誌を書く。駒石「翠山樓」を建てる。蘇門、詩を贈る。  |
| 1790 |      | 49 | 8月、母などを、68歳で亡くなる。蘇門、墓誌を書く。                      |
| 1791 |      | 50 | 江戸定府詰めとなる。                                      |
| 1793 |      | 52 | 駒石の「翠山樓詩鈔後編」できる。蘇門、序文を書く。                       |
| 1795 |      | 54 | 従五位下伊勢守に任せられる。駒石の「翠山樓詩鈔」後編上梓。                   |
| 1797 |      | 56 | 駒石の母が亡くなる。                                      |
| 1798 |      | 57 | 駒石、病気となり、正月14日、57歳で亡くなる。                        |
| 1799 |      | 58 | 藩邸失火。病氣のため職を辞す。隠居を願い出て、50人扶持を給せられる。お菊生まれる。      |
| 1800 |      | 59 | 墨田の別荘に移る。                                       |
| 1801 | 享和 元 | 60 | 芝の屋敷失火。   |
| 1803 |      | 62 | お菊4歳、木曾に連れて帰る。8月、お菊亡くなる。平洲、74歳で亡くなる。            |
| 1804 | 文化 元 | 63 | 蘇門、水無神社へ池井祐川の絵による絵馬を奉納する。                       |
| 1805 |      | 64 | 江戸で第6子勇之助生れる。                                   |
| 1806 |      | 65 | 蘇門、水無神社へ池井祐川の絵による寒山拾得の絵馬を奉納する。                  |
| 1808 |      | 67 | 4月2日、勇之助亡くなる。                                   |
| 1810 |      | 69 | 12月、蘇門の奥方嘉彌子亡くなる。                               |
| 1811 |      | 70 | 渡辺方壺、木曾に来る。                                     |
| 1813 |      | 72 | 3月、蘇門、木曾に帰り、70歳の祝をする。                           |
|      |      |    | 5月、原古處、江戸よりの帰り木曾に入り、蘇門を訪問する。「清音樓」扁額の書を書く。       |
|      |      |    | 渡辺方壺と蘇門の詩集「忘形集」できる。                             |
| 1814 |      | 73 | 11月、古處、秋月に帰る。石梁、久留米に在り。                         |
| 1815 |      | 74 | 蘇門、木曾に在り。9月、方壺と共に翠山樓に登る。冬、蘇門、江戸に上り、赤羽に滞在する。     |
|      |      |    | 2月、蘇門、柳箕嶺、菅茶山と柳橋に舟遊びをする。                        |
|      |      |    | 3月3日、赤羽の邸にて曲水の宴を催す。                             |
|      |      |    | 江戸在住の学者など17人が集まり詩作する。詩を「暢情集」にまとめる。              |
| 1816 |      | 75 | 蘇門、一時木曾に帰る。                                     |
| 1817 |      | 76 | 蘇門、江戸に在り。石梁としばしば会う。5月、古賀精里、68歳で亡くなる。            |
| 1818 | 文政 元 | 77 | 3月、隅田川で花見をして、詩会を催す。「墨水集」できる。                    |
|      |      |    | 4月、石梁、久留米に帰る。方壺、俄に山村邸に来る。石梁文集刊成。立原水軒、75歳で亡くなる。  |
| 1819 |      | 78 | 3月、「清音樓詩鈔」できる。蘇門、軽井沢にて病む。夏、また赤羽邸にて病む。           |
| 1820 |      | 79 | 山村家学問所を建てる。                                     |
| 1821 |      | 80 | 蘇門、江戸で新年を迎える。                                   |
| 1822 |      | 81 | 蘇門、10月1日に江戸を発つて、11日本曾に着く。                       |
| 1823 |      | 82 | 蘇門、1月16日亡くなる。                                   |
|      |      |    | 石梁、墓誌を撰す。                                       |

参考:「山村蘇門」今田哲夫著